

# 蘇る吉野、柏木の平和思想

## 安中教会で吉野作造記念館館長・大川氏が講演

昨年吉野作造記念館（宮城県大崎市）で開催された企画展「自由を愛し、平和を貴く―吉野作造と安中教会―」開催期間・2016年10月9日～12月28日）は、植民地政策への痛烈な批判を含んだ強固な平和思想を唱えた安中教会（群馬県安中市）牧師・柏木義門と、柏木を生涯支えた盟友・湯浅治郎、そして大正デモクラシーの理論的指導者として知られる吉野作造、3人のクリスチャンの交流と共闘をテーマとしたものでした。

本企画展の開催にあたっては、日本基督教団安中教会をはじめ、学校法人新島学園、株式会社有田屋など、安中市にある関連団体・施設に多大なご協力をいただきました。こうしたご縁から、企画展終了後の今年1月

24日、安中教会の江守秀夫牧師が協力の下、安中教会会堂にて記念講演会「平和の意味を問いつづける―柏木義門・安中教会と吉野作造から学ぶ―」講師・大川真・吉野作造記念館館長）が行われました。

安中は新島裏がアメリカからの帰国後最初に伝道を行った地であり、安中教会は、新島に洗礼を

受けた味噌醤油醸造業有田屋の当主・湯浅治郎ら30人の信徒により、1878年（明治11）に創立した、旧組合教会に属する教会の中でも指折りの歴史ある教会です。なお、講演会場となった現在の石造りの教会堂は、正式名称を「新島裏記念会堂」といい、新島裏召天30年を記念して1919年（大正8）完成しました。

第5代牧師の柏木は教会の機関紙として『上毛教界月報』を1898年（明治31）以来38年にわたり発行し、鋭い非戦論や社会批評を展開しました。また、組合教会が朝鮮総督府の援助の下で押し進めた朝鮮伝道について、湯浅、吉野と共にその帝国主義的な実態を厳しく指摘し、反対し続け



たこと知られています。吉野と柏木の関わり

は、1914年（大正3）に始まります。折しも全国協同伝道が行われていた時期です。洋行帰りの吉野はこの年3月に安中教会に招かれ、ドイツの地方の状況について講話をしています。以後も吉野が安中や高崎で講演を行う際に柏木が訪ねたり、柏木から吉野へ『上毛教界月報』を送るなどして、2人は交遊を深めました。

和主義・思想の歴史的な潮流の中で、柏木や吉野の位置づけを問うものでした。講演では、近代日本における平和論者として内村鑑三や柏木、吉野を挙げ、原著を読解しながら彼らの平和思想を構造的に解説しました。特に柏木については、その論が極めて合理性・論理性に富む点を指摘しました。また、新島学園に現存が確認された柏木あて

「吉野と柏木の交流について初めて知った」などの感想が寄せられました。吉野作造が初めて安中を訪れてから100年あまり。こうして再び安中の地で吉野・柏木らの平和の思想、交流の足跡を振り返ったことは、これらの平和を考える上でも意義深いものとなりました。（レポート・佐藤弘幸）  
吉野作造記念館学芸員

吉野書簡2通を紹介しました。いずれも内容は柏木の記事に対する吉野の感想で、柏木への共感と敬慕の念が伝わります。特にうち1通は、柏木が書いた満州事変（1931年）への批判記事に対し、全く同感との意を表したもので、東京と安中、遠く離れたつも志を同じくした両者の「魂の交流を示す貴重な史料」と講師の大川館長は語りました。

来場者からは、「長年柏木には関心を抱いていたが、歴史的な流れの中でその思想の位置づけや価値を知ることができた」